砺波地方の真宗風土と

妙好人

《目　次》

Ⅰ 越中の妙好人

1．妙好人とは？ ・・・・・・・・・・・・・・・1
2．妙好人と越中 ・・・・・・・・・・・・・・・2
3．妙好人と現代 ・・・・・・・・・・・・・・・6

Ⅱ 道 宗 道

1．道宗道の復興 ・・・・・・・・・・・・・・・7
2．偶然の賜 ・・・・・・・・・・・・・・・・・10

Ⅲ 砺波詰所初代主人（北村）長助

1．詰所の始まり ・・・・・・・・・・・・・・・11
2．砺波詰所初代主人(北村)長助 ・・・・・・・12
3．長助の死後、砺波詰所としての供養 ・・・13

Ⅳ 明治の妙好人 砺波庄太郎と真宗風土

1．砺波庄太郎 ・・・・・・・・・・・・・・・・14
2．砺波の真宗風土 ・・・・・・・・・・・・・・15

砺波地方の真宗風土と

妙好人



Ⅰ 越中の妙好人

1．妙好人とは？

① 語　意

念仏者の称号で、主に浄土真宗の篤信者をさす。「妙好人」の語は、『観無量寿経』（観経）で念仏者を「人中の分陀利華（白蓮華）」と説くことに由来する。唐の善導は『観経疏　散善義』で、分陀利華は好ましく希有で上々の花であり、念仏者をこれに喩え「人中の好人、人中の妙好人、人中の上上人、人中の希有人、人中の最勝人なり」とする。

本来は一般の念仏者を指す語で、近世中期に本願寺派の仰誓が『妙好人伝』を著わし、これが広く流布して以来、特に真宗の模範的な信者を称するようになった。妙好人像は時代により変化し、本山・宗主・主人への忠誠、父母への孝行や、奇行・霊験などが顕著に見える。

その多くは貧しく無学な農民や商人で、死後の往生を願って念仏に励み、現世では領主や本山に随順し、内面的充足と外面的忍従の一生を送った。大和の清九郎・讃岐の庄松・因幡の源左等が、理想的信者像として、聴聞の場を通じ真宗門徒の間に広まった。さらに、石見の下駄職人で宗教詩を多く残した浅原才市は、鈴木大拙の紹介により、広く一般に知られるようになった。

真宗教団の上層部が異安心をめぐり、たびかさなる教学論争で混乱する中、庶民の間で妙好人の姿を通じ、正しい信心のあり方が見直されて行った。これは、教学や組織の硬直化と、民衆の自律的な宗教意識の育成という、近世後期の時代性を表している。

②『妙好人伝』

6篇あり、各篇は上下に分れ、合計12巻となる。近世から近代にわたる真宗篤信者の伝記集で、初篇は本願寺派の仰誓（1721-94）が編集し、没後に門人が手を加え、天保13年（1842）に同派の僧純が刊行する。僧純はまた第2篇から5篇までを編集し、天保14年・弘化4年（1847）安政3年（1856）・同5年にそれぞれ刊行した。第6篇は松前の象王が仰誓の伝の続篇として編集し、嘉永5年（1852）に刊行している。僧純の第5篇刊行の頃から、全6篇12巻が一括して扱われるようになった。明治以降も活字で版を重ね、種々の類書が作成されている。

全篇で157名収録し、大部分が無名の農民や商人で、地域的には近畿地方が中心となっている。真宗門徒の信心ぶりが典型的に現れており、近世・近代における門徒の思想形成の方向を示す。

彼らは念仏三昧の生活を通じ、現世に深い充足感を持つ一方で、世俗道徳を遵守し領主や本山の命に随順するなど、宗門側の希望する信者像を示している。この点で、宗祖・親鸞との異同が論議されている。



『妙好人伝』全６篇

③ 時代背景

近世では幕府の奨励下、学事組織が整備され学匠が輩出した。そのため真宗の教学研究が盛んになり、宗学が洗練されていった反面で、宗教上の統制も厳格になり、異義を排斥する傾向が顕著になってきた。真宗では、このような異義を「異安心」と言い、教団が正統と認める方向から逸脱した形で教義を解釈し、頑なにそれを奉じて行動することを意味する。

また幕府は寺檀制度を整備し、民衆の支配に寺院を利用していた。檀家が切支丹ではないことを保証するだけでなく、当時の寺院は一種の戸籍事務を扱う行政機関の役割も果していた。したがってこの時代、寺院の意向は直接民衆に大きな影響を及ぼし、異安心問題もしばしば民衆を巻き込んだ大事件に発展している。

近世中期に浄土真宗本願寺派で、僧俗を巻き込み本山まで震撼させた、「三業惑乱」という大きな異安心騒動があった。これは、身（体）口（語）意（心）の三業を正し、阿弥陀仏へ救いを願い求めよと教える、三業帰命説の正否をめぐり本山と在野の学匠が論争して、宗派内で決着がつかず暴動にまで発展した一件をいう。

宝暦12年（1762）第六代能化の功存が『願生帰命弁』を著したことに始まり、文化3年（1806）幕府の裁断が下るまで、44年間続いた。その結果、多くの学匠が処罰を受け、関係書籍が絶版となり、本山も百日の閉門を言い渡されるなど、前代未聞の事態となる。

越中では、尺伸堂学派に連なる学匠が三業帰命説を奉じており、とりわけ氷見・西光寺の義霜が布教の中心的な役割を果たしていた。そのため義霜は、寺社奉行所から召喚され江戸で取り調べを受けた上で、本籍地などに住めなくなる軽追放に処せられ、尺伸堂学派の活動が大きく停滞することになった。この時に越中の門徒衆は、伏木の勝興寺や金沢別院へ大勢集まったり、三業帰命説を従来の通り相承することができるよう、嘆願書を出したりしている。関係者が処罰された後も、越中では三業帰命説が根強く残っており、文化14年（1817）本山の使僧が、宗義を改心させる目的で下向するまで、僧俗とも混乱をきわめていた。

『妙好人伝』は、本山がこうした異安心騒動で、混乱をきわめた後に編集された。三業帰命説と直接対決する、信心問答が見られる伝記（氷見郡一刎村「能与女」四編下・後出）もあり、そこにはっきりとした編集者の意図が窺える。

2．妙好人と越中

① 赤尾の道宗

道宗（？－1516）は、越中赤尾の人で、俗名を弥七という。角淵刑部左衛門の子として生れ、4歳で母が亡くなり、13歳で父が亡くなり、伯父に育てられた。29歳頃、蓮如上人（77歳）に仕え、真宗の教義を篤く信じた。明応5年（1496）2月28日に、道宗へ与えた『御文』によれば、その6年前より毎年上洛して、上人に常随しながら聞法を重ねた。39歳の時、「赤尾道宗心得二十一箇条」（後出）を記す。永正13年、55歳で往生する。道宗の道場跡である赤尾の行徳寺においては、65歳で往生と伝える。もしこの寺伝に従えば、同じ『御文』にある「年はいまだ卅にたらざりしものなりけるが」という道宗の発心は、山科本願寺建設（1480）前後となる。没年に関しては、『実悟記』三十五条に「道宗は永正十三年月日往生す」とある。



赤尾道宗心得二十一箇条

②『妙好人伝』

『妙好人伝』より、越中に関する5人の伝記を、全文掲載する。

【九歳児】（二編上）

今茲（ことし）の秋、越のかたにかへりて、したしき法友の先達しあと訪ひ侍りしに、幼きものゝ、こと し九ツになれるが、重き病をうけて、たのミ少なきさまを見侍りて、いとかなしく、枕によりて、さぞ術なからん、など問しに、かしらをあげて、誠に術なく候。もはや、かゝ様の元はあきはて候へば、片時もはやく爺様（ととさま）のすミ給ふ仏の御国へといひさして念仏するにぞ、哀さいやまさりて、落る涙を衣の袖にてはらひ、なに〜、爺さまの居給ふ御国へハいかゞしてまゐらむとこゝろえ候やと問バ、一度御仏にたすけられまゐらせさふらへバ、必つれゆかせたまふべしと、たのミをかけて念仏申候と、すゞしき答に、いと尊さまさりつゝ、推返して、疑ひハなきやとたづぬれバ、なにがさてといひて、念仏数遍し、夫より一日ながらへて、薬をも飲ず、をはりを待かねたる風情にて、つぎの日、念仏と共にねむるがごとく息たえしこそ、不思議におぼえはんべれ。

この小児の領解ハ、聴聞の功とやせん、宿善のもよほしとやいはん。他力不思議にいりぬれバ、義なきを義とすと仰られ候も、かゝる事どもにてぞ候へんか。機の、法の、兎の角のと、わづらハしきあつかひやまぬ人ハ、かゝる事どもよく〜あんじ給ひて、たゞ不思議と信じさせ給へかし。世の人つねにいふ。本願にほこりて罪をつくるとまうす。予、思ふに、しからず。ほこるほどの信者、今の世にハ希なるべし。継母にあまゆる子をいまだ見ず。真実の子なれバこそ、父母をかさにきてあまへほこる事なれ。本願にあまへほこるほどの身になりし人ハ、誠にうらやましく候。あら〜しき罪悪の目にかゝりて、嗜たき心のおこるも、ほこるほどに本願をふかくたのミぬる身にありてこそ、あらはれきたる他力の御催しなれ。身にて定る往生ならバ、中風などの病人ハ、往生かなふまじ。口にて定る往生ならば、言語かなハぬ病をうけたらん人ハ、往生不定なるべし。意にてといハゞ、狂人にならバいかゞせん。然バ、機の三業の上にハ往生の業因ひとつもなし。たゞ若不生者の御誓ひゆゑにこそ、往生し侍るべけれ、と打任せてよろこび申さん人こそ、まことにうらやましき信者なれ。

延享四丁卯冬十月　　休々道人僧撰（ママ／僧樸1719−62は、射水郡小泉村生れの碩学）

【佐治兵衛】（三編上）

越中国富山中野町、米屋佐治兵衛祐心といふ仰信の人ありて、柔遠師の徳をあふぎて、同志の人をいざなひ、一切経を寄附し侍りぬ。其後、高祖聖人の五百五十回の御忌について、御影堂御修覆の思召あらせられし時、この祐心上京せしが、御影堂の前にて、杉の屋根板一枚ひら〜と目の前へ落けり。その時思ふやうハ、御真影の思召にて、我に屋根板を募縁せよとの御知せなるべしとて、速に本国にかへり、姉（ママ）負新川両郡の同行をいざなひて、弐千金ばかり掬へ、飛騨国へゆき、老枚（ねづ）板および材木をもとめ、夫より越中へ引下して、大船にて下の関より大坂につけ、難なく京へ持はこバせて御用にたちけれバ、是、偏ニ仏祖の加被力なり、と歓喜踊躍せしとなり。就て、大善知識、あつく御満悦のあまり、御ねんごろなる御書を両郡へ下されければ、一同よろこび侍りき。よりて、今にいたるまで御法義相続の助縁と成ぬ（柔遠1742−98は、滑川市・明楽寺住職で、空華派の学匠）。

○或時、この人、家内眷属に向ひていへるやうハ、我、これまでたしかにぞんじたる此娑婆が、夢のやうに思ハれ、これまで夢のやうに存じたる極楽浄土がたしかに思へるハいかなる御慈悲ぞと、涙にむせびて喜バれしとなり。此人、文化十二年の頃、六十歳ばかりにて、目出度往生を遂侍りぬ。

同国の新庄に大江千屋何某といへる人あり。或時、同行中に向ひて云やうハ、善知識様方の御名に、法如上人の、本如上人のと、ミな如の字を付たまふハ、わけのある事にて、かくの如く、件の如く、などゝいふが如くにて、前にいふたとほり相違なひといふ心にて、今の善知識の御教化も、祖師聖人の御すゝめの如くぞヤ、と云事て如の字を御付なさるゝと聴聞いたせしが、尓レハ、御本山ハ生如来様の御在所なれハ、一同に御馳走申上て下されといへバ、人々随喜して懇志を運びしとなり。此事、同国の司教師より承り、此ニに（ママ）記す。

【幼女】（四編上）

越中国の塩村大永寺に、七歳になりける幼女、疱瘡を煩ひ養生のためとて、三里ばかり北にあたる富山の類寺へ父母ともにゆきて、昼夜看病せられけるが、次第に病おもりて往生の覚語（ママ）もいかゞあらんとおもひながらすゝめかねて日を歴るに、再取戻すべきやうもなき病躰なれバ、母、すき間を考へて問やう。其方ハまう死ぬるてあらふ。今死たらバ何方へ行ぞといへバ、幼女、目をひらきて母の顔をながめて、わたしハ死ねハ極楽へゆきます。阿弥陀様が御馳走をなされて待かねてこざる、といひて念仏せしが、又、母尋ねて、その極楽へハいかゞして行ぞといへハ、幼女の云。阿弥陀様におハれて行ますといふ。母大きによろこびて、これを住持にかたる。

住持も喜びて枕のもとにゆき、今一往たづねんといへハ、母これをとゝめて、あのやうに苦しかりて居ますもの止にして下されといふ。住持きゝ入れず、右のごとくに問けれバ、答ること又同じ。扨、亦問やうハ、何ゆへに阿弥陀様がおふて行しやるぞといへハ、幼女の云。わたしハわけハしらねとも、阿弥陀様ハわたくしがかわゆふて〜てならぬそふなといへハ、住持も落涙して、仏智不思議の御念力が幼女の胸の中まで入こミて、斯のごとく領解いたさせ下されたり、と喜びしとぞ。其頃、世に伝へて知ざる者なし。浄心房充賢師の物語にて承ハり侍き。

【能与女】（四編下）

越中国射水郡一羽（ママ　一刎？）村といへる処に、長右エ門と申す者の娘に、のよとて廿六歳なり。父の代までハ相応の百姓なりしが、身上衰微し、其上男子なくして、右ののよ一人、殊に愚なるものにて、年ふけるまで独身にて、わつかに二三反の田を人に当置、いと幽に暮しぬ。此女の宿坊ハ氷見の光明寺なりけるゆへ、常に行き何くれとなく取持せしが、その間に法談を聴聞せしが、いつのまにか宿善時いたり、法義を大切によろこびしが、其後大病にて打臥し、たのミ少く見えしゆへ、その従弟なるもの、枕の下にいたりて法門の心得を示しけれハ、女のいはく。

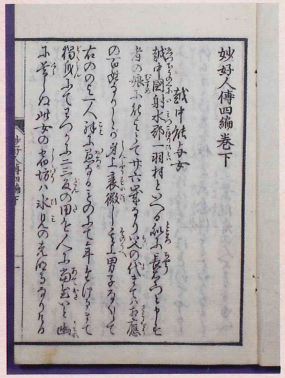
我ハ年頃聴聞せしごとく、阿弥陀如来ハ無二無三に、かやうな愚なるものを浄土へつれ行てやる、と仰らるゝ御意を信じて、只念仏するばかりなりといへば、彼男ハ、いまだ三業執着の人なるがゆへ、嘲笑ふて云やう。何とて左様の大様なることを云ぞや。弥陀をたしかにたのミたる一念の領解もなくて浄土へ参らんとおもふことの愚かさよ、早々如来をたのミ奉るべし、と切に勧めしかハ、女の答に、我等におひて極めて浄土へ参るなり。去年より煩ひて、この春三月、蓮如様の三百五十回御忌御引上の御法筵の比に本服し、又床につく。夫をも前より知て居るなり。又、これより次第に衰、四月十九日にハ必命終する。その子細ハ、この正月の比、ある夜の夢に殊勝なる御僧の来りまして、しか〜の御告に、必浄土へつれ帰るぞとのたまひしが、果して御法筵に本服し、亦、床につきしうへハ、必四月にハ命終るべし。猶疑しくおもはれなバ、我死して葬式のせつ、灯籠の竹を灰塚にさしおかるべし。その竹に芽を生るならバ、我浄土へ生れしとしるべし。此家并にいさゝかの田地まで売代なし、その半分ハ御本山、半分ハ光明寺に納めたまへ。若、その竹枯てしるしなくハ、我地獄へ堕たりとおもハはれよ。しからバ此家并に田畑残らず其方の心のまゝにせらるべしといへハ、かの男云やう。汝、もし浄土に生れずバ、弥祠堂などに納めてこそあらめ。何ゆへさやうに云ぞやと。女答て、それも御法談にて聴聞すれバ、此世の追善などハ未来のためにハいさゝかのたすけなるよし、我浄土に生れなハ其御礼にこそ奉るべけれ。されハ、験なくバ心のまゝにせられよといふなりと。是において彼男、又云ことなくて帰りぬ。

果して四月十九日に死せりといふ訃におどろきて、かの従弟なる者来りて葬式とり行ひ、扨、遺言のことなれハ、二本の竹を六段ニ伐、灰塚にさし置ぬ。さるを、童の所業にや、二本ハぬき捨つ。残四本の竹、五月の末より逆に芽を生じけるに驚き、先二本をぬきて見るに、さしたる口より白き根生じたり。扨ハ奇異なりとて、元のごとくさし置しが、其二本ハ枯たり。残二本の芽ハ、弥延て一尺斗末より、又上さまに立のぼり、青々として栄えたり。此奇瑞、四方に伝聞て見物に来る人夥しく、其霊瑞を感じて群集せしゆへ、村長領主へ訴けれハ、命をくだして垣を結ハしめ、乱に入ことを停められる。されども、懇情のものにハ、密に見せしめけり。

此こと、宿坊なる光明寺の親しく事実を正し咄ありしことを、印定勧学の物がたりにて承り侍りぬ。誠に末代の奇特とやいふべし。尤、射水・砺波の両郡ハ、その比三業の固執の徒多かりしに、此奇瑞を見聞して回心するもの数多し。是、全く中興上人の感応なるべし、と印定師の評せられしまゝを筆とりて録す。時ハ天保元寅年のことなり。



『妙好人伝　四篇下』



おのよ伝



おのよ墓

【多平】（五編下）

越中国石動郡下中村の多平といへる人ハ、西中村の願照寺の門徒にて、壮年の頃より御法義に志しふかくして、御法座とあれバ、手次ハ勿論近村の寺々へも参詣をいたし、大切に聴聞し、いつも初音の心持して法味をあまんじ、厚くよろこびけるゆゑ、他の人にも愛せられ、殊に冥加をおもひ、食事にむかひて不足をいはず、我口ハ東海道のやうなもので、貴人も平人も通行するごとく、美味を食するも麁食をたべるも、其日〜の御与へなり、といひて戴き、又、小寄講その外同行の家にいたり、御法座も済て酒飯茶など出るときハ、世間の雑話になり易きものなり。此人ハ、味よきものをたべるにつけても、追付御浄土へ参り、百味の飲食を下さるゝときハいかほどかうれしき事にあらんといひて、更に余事の咄せず、只御縁をまうけしとなん。又、此人、多くの子供に御法義をすゝめて、御慈悲を喜ばせしゆゑ、他の同行も随喜して、常念仏の多平と異名せしとなり。

此人、弘化四年の二月廿四日、七十歳にして、目出度往生を遂しが、不思議なるかな、廿六日灰葬のとき、頭の白骨に聞其名号信心歓喜乃至一念至心回向等の文字あきらかに顕れけれバ、見聞の人々おどろきいへるやうハ、日頃大切に聴聞せられし信徳の所感なり、と称じ侍りしとそ（「聞其名号信心歓喜…」は『無量寿経　下』第十八願成就文にみえる）。

③長助・砺波庄太郎

【長助】

長助は文化6年（1809）広瀬舘小坂（南砺市）にいた、六兵衛（北村家）の三男として生れた。20代の頃から上京し、炭屋に奉公した。文政6年（1823）東本願寺の焼失後、砺波郡から多くの門徒が奉仕に詰めかけた。その世話をするため、詰所の奉仕に専念し、天保12年（1841）33歳で取持になっている。生涯独身を貫き、砺波詰所で奉仕生活を続ける中、安政5年（1858）6月、また大火に遭い、わずか2年で両堂の再建を果たす。しかし元治元年（1864）7月、禁門の変における兵火でこれも焼失する。慶応元年（1865）達如上人が失意のうちに逝去し、翌年3月、長助も58歳で亡くなった。

【砺波庄太郎】

天保5年（1834）10月、越中国砺波郡般若村大字頼成（砺波市頼成）の農家、坂東太兵衛の五男として生れる。本名を坂東忠兵衛といい、のちに庄太郎と改名する。京都では出身地にちなんで、砺波庄太郎が通称となる。安政5年（1858）9月、25歳の時、焼失した東本願寺両堂再建工事を手伝う。翌年、再び上京し、砺波詰所に入る。文久元年（1861）5月、第二代砺波詰所主人となる。明治13年、現如の加賀・越中巡化に随行する。明治36年（1903）6月、金沢で発病し、21日縁者の家で往生する。享年71歳。

3．妙好人と現代

①行の念仏

仏教ではただひとつの教えを信じて、ひたすら行うことが重要とされる。それは例えば、十六羅漢の一人だった周利槃特（しゅり・はんどく／梵語：チューダ・パンタカ）の故事に、はっきり示されている。

周利槃特は愚かでまったく持戒できず、兄の槃特に叱られ、還俗するよう命じられた。それで精舎の外に立ち泣いていると、釈尊が見かけて箒を一本与え、常にその名を唱えるよう教えられた。やっとその言葉を覚え、毎日唱えているうちに、箒の別名を「除垢」ということに気づき、釈尊の教えは心の汚れを払う点にあった、と悟った。それから一心にこれを修め、ついに阿羅漢となった。

浄土教の根本は、ただひたすら「南無阿弥陀仏」と称える、行にある（「念仏成仏これ真宗」親鸞作・浄土和讃）。極論すれば浄土教のあらゆる教学は、念仏行に対する補足説明といえる。たびかさなる異安心事件で明らかなように、あまり教義に捉われると迷宮へ陥り、正邪の判断ができなくなる。

妙好人は知識・見識に捉われず、ただ一心に念仏して、純粋な信心が発露するまま、日常生活を営んでいた。それは時代や地域に関係ない、理想的な宗教的人間像の一類型をはっきりと示しており、現代を生きる上で、かけがえのない指針を与えてくれる。

②妙好人の念仏

このように個人における宗教経験の視点では、念仏者の鑑として、妙好人の言行は、高く評価されている。ただし集団における宗教経営の視点では、既成教団の広告塔として、都合よく利用されている傾向がある。またあえて厳しく見れば、妙好人は社会の進歩や改革に対し、積極的な意欲に欠け、支配者側の言いなりになっている。

妙好人たちの言行を、現代に活かそうとするとき、その時代性を考慮して、まるまる鵜呑みにしないよう注意したい。単純に偶像崇拝するのではなく、彼らが前時代の身分的束縛や、社会的制約の中で生活していたことを考慮して、ある程度批判的に伝記の内容を取捨選択する。そうして妙好人たちの行実に窺える、信心の真髄を捉え、いま実際どのように活かせるか、よく検討してみる必要がある。

また、妙好人たちが生活のよりどころとした念仏に対して、観念的な捉え方に止まらず、経験を通し深く理解する。その際は、ただ自分だけがありがたく念仏していれば良いという、独善的な態度に止まるべきではない。念仏することで日々の生活がより心豊かなものになるよう、よく気をつけつつ、さらに他者へはたらきかけて、多くの人々が幸福になれる方法も、模索して行きたい。

③現代の妙好人

妙好人は近代で途絶えたわけではなく、現代でも全国各地で輩出している。しかし残念ながら富山県では砺波庄太郎以降、ひろく名の知られた妙好人は出ていない。

ただしこれは決して、妙好人がいないことを意味しているわけではない。真宗王国と呼ばれる県内には、その人格や心境において、妙好人に匹敵する篤信者が、今でも必ずいるだろう。

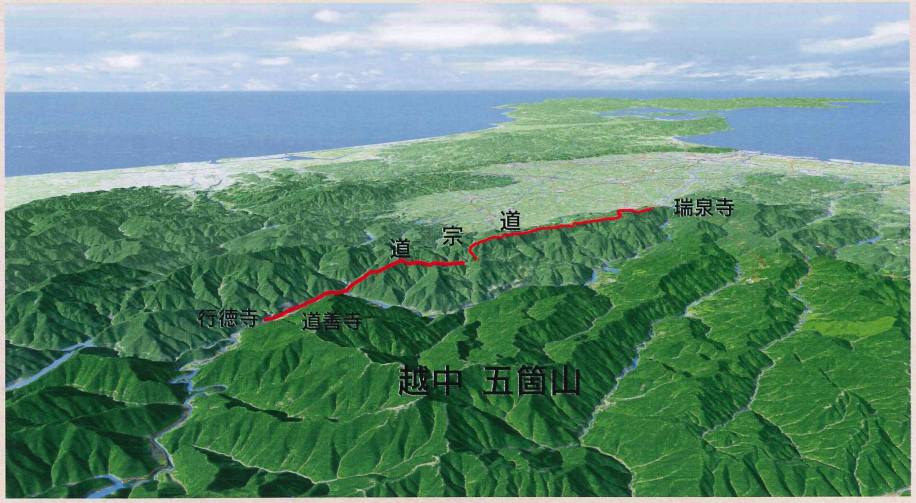
妙好人として認知されるためには、やはりその人の言行や作品などが、公表されている必要がある。もし身近にいる、優れた念仏者の言葉や行いを詳しく記録しておくなら、今後また新たな妙好人が、地域から現れて来るかもしれない。

II 道宗道 (どうしゅうみち)

1．道宗道の復興

この道の名前の由来となっている道宗は、500年余り前、浄土真宗本願寺第８代・蓮如の教えを受け篤い信仰生活をおくりながら五箇山地方に真宗の教えを広めた人で、五箇山赤尾谷の出身であったことから「赤尾の道宗」の名で知られ、妙好人として後世の人々に仰がれています。

道宗は生活のたしなみとして、月に一度は井波の瑞泉寺に参ることと決めて長年通い続け、その道は誰言うとなく「道宗道」と呼んで今日に伝えられています。



道程は、旧上平村西赤尾にある行徳寺、新屋にある道善寺を起点として井波の瑞泉寺まで、約30ｋｍのほとんどが尾根筋の山道です。道宗は朝暗いうちに歩き始めその日のうちに瑞泉寺に着いたと伝えられています。



尾根筋の道宗道からは散居村風景が一望できる

通った道は季節や天候、道の状態等で必ずしも定まったものではなかったと考えられますが、書き記されたものもなく、山道は時の流れと近代化の波に埋もれるようにいつしか雑木に覆われてしまい、忘れ去られつつありました。そこに南砺市の“へそ”（中心）に標となる表示板を建てようとしたことがきっかけで、この道を復興しようという機運が高まり、平成20年に城端山岳会を中心とする南砺市内の山岳関係者ら有志が「道宗道の会」を結成し、一般の方々の応援も頂きながら雑木等の刈り払いを行い、2シーズンを費やして全線を歩行できるようにすることができました。

今回復興した道宗道は現存する山道や地元で言い伝えられていたルートをつないだもので、一部、眺望や維持管理、安全等を考慮しルートを変更している箇所もあります。





残雪の道宗道

一方、終点の瑞泉寺は道宗が生きた時代と現在とでは場所も異なっており、今回復興したルートは「平成の道宗道」ということになるかもしれません。

近年、県内では最も高所にあるといわれる山城跡が高清水山系を辿る道宗道周辺から発見されています。杉山、赤祖父山、八乙女山周辺等には中世に造られたといわれる大きな堀切や平地が点在しており、当時の一向一揆の攻防を連想させるなど、歴史ロマンを感じさせてくれます。

また、尾根筋の道宗道から見下ろす砺波平野には日本一の散居村風景が広がっており、豊かな自然の楽しみに加えて見所の多いこの山道は観光トレッキングコースとしても最適です。

一度、妙好人 道宗の生きた時代に思いを馳せながら歩いてみてはいかがですか。



大寺山頂付近より立山連峰遠望



南砺市のへそより白山遠望



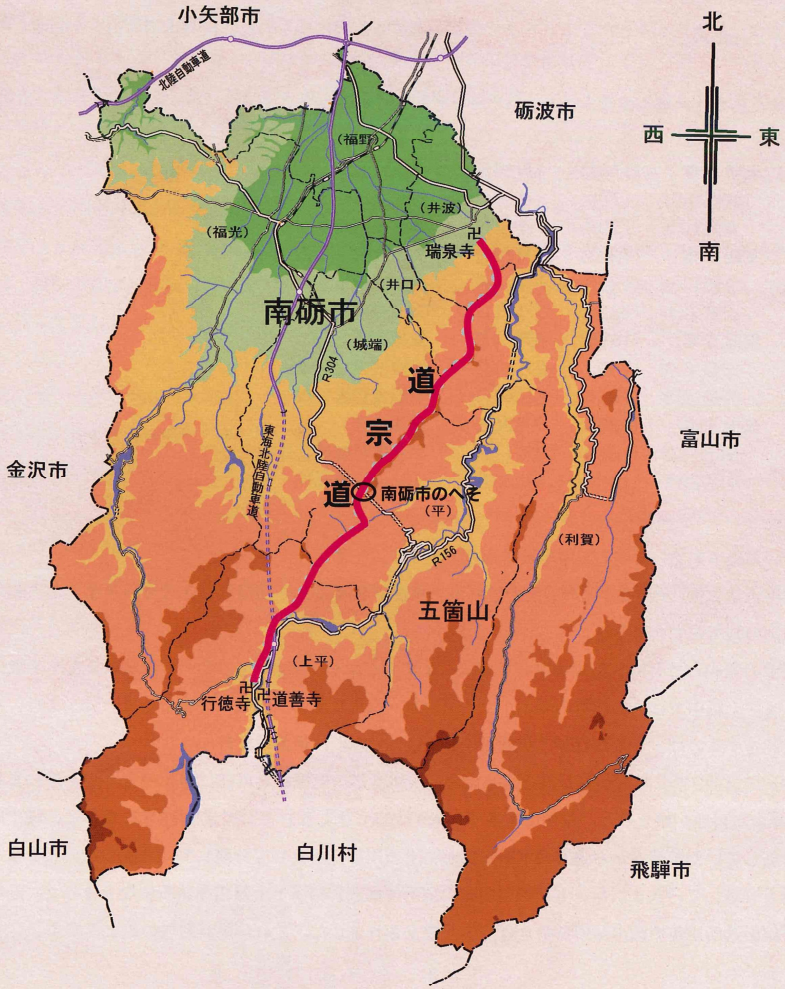
瑞泉寺

道宗が生きた時代の瑞泉寺は現在の場所ではなく東側の高台にあり、一向一揆の拠点となっていました。

2．偶然の賜

現在、南砺市の「へそ」にはそれを示す表示盤が設置されており、そこを道宗道が通っています。また、「へそ」の真下には国道304号で最長の五箇山トンネルが通っています。

へその位置が道宗道上になったことは、平成16年の旧8町村の合併がなければ起こり得なかったことであり、偶然の賜です。「道宗道」と「南砺市」、そして「へそ」の間には何か不思議な“縁“を感じさせられます。



Ⅲ 砺波詰所初代主人(北村)長助

1．詰所の始まり

浄土真宗東本願寺は江戸後期において、四度の火災に会い、両堂（御影堂・阿弥陀堂）の再建を繰り返してきました。現在の両堂は明治度に再建されたものです。いずれの時も、全国の門徒が再建にむけて多数労働奉仕に上京しました。これら奉仕者が宿泊するために作られた、出身地別の宿舎が詰所の始まりです。

四度にわたる再建事業は次のとおりです。

天明８年	**(1788)**	**1月30日**	**天明大火**
寛政 元年	(1789)	3月28日	寛政度再建始まる
寛政10年	(1798)	4月 2日	寛政度再建完成
文政６年	**(1823)**	**11月15日**	**文政大火**
文政11年	(1828)	6月28日	文政度再建始まる
天保６年	(1835)	3月11日	文政度再建完成
安政５年	**(1858)**	**6月 4日**	**安政大火**
安政６年	(1859)	2月11日	安政度再建始まる
万延 元年	(1860)	8月 4日	安政度再建完成
元治 元年	**(1864)**	**7月20日**	**元治大火**
明治13年	(1880)	10月 1日	明治度再建始まる
明治28年	(1895)	4月20日	明治度再建完成

この再建事業で、越中の詰所の動きをみてみます。

寛政度再建では、最初5カ国の詰所でしたが、やがて全国に60か所ほどにふえていきました。越中では、越中国の詰所ができました。

両堂の完成とともに、詰所はやがて解散します。しかし、文政5年の大火で両堂はまたもや焼失してしまします。越中では当初門首の発示が出る前から、京都に詰め、再建の準備をしました。また、京都に詰め世話をするのは、寺と同行が二か月交代していました。（善徳寺史料）

やがて文政9年に門首から「再建発始直命」が出ると、全国から再建に奉仕の人々が上京しました。文政9年から再建が始まると、越中でも多くの人が上京しました。そして文政12年になると、越中国の詰所を管轄していた善徳寺から遠方の下新川郡が、下新川郡詰所として分離していきました。まもなく射水郡詰所も分離していきました。もとの越中国の詰所は砺波郡詰所と上新川郡詰所になりました。それも分離し、砺波詰所が越中国の詰所を引き継ぐ形で設立されました。これが砺波詰所の始まりです。

2．砺波詰所初代主人（北村）長助

長助は南砺市（福光）小坂出身で北村六兵衛家（現北村実家）の三男として文化6年（1809）に生まれました。家は代々京都へ奉公に行く家であり、10代で京都の炭屋へ奉公に行きました。両堂再建に参加していたと思われます。長助は炭屋に奉公していたら、郷里から多くの人が奉仕にきて、郷里出身の親しさから長助をたよりました。次々と上京する人々のために、長助は奉公を郷里の甥恒七を呼び寄せて継がせ、自分は心置きなく、詰所の世話に専従し、生涯独身で、詰所の世話人の道を歩みます。

北村家には長助ゆかりの品として、天保5年の「御直命」が仏壇にあります。それは門首が直接門末に話したものです。これを手にした長助はどんなにか感激したことでしょう。この直命を手にし、詰所の取持ちをする決意が固まったのでしょう。

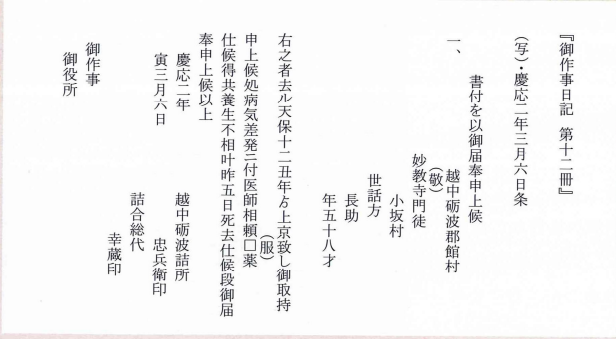
長助が取り持ちになったのは、天保12年です。文政度再建の両堂は再建しましたが、門や諸殿の再建がまだまだ残されていました。長助がその文政度の再建事業に取持していた時、まさかの安政大火で両堂は焼失していまいました。その時長助はこれまでのような、寺が交代で詰番する形に戻さず、砺波詰所の主人となって、再建に奉仕しました。これが、長助砺波詰所初代主人といわれるゆえんです。安政5年には親鸞聖人の600回忌があり、全国門徒はぜがひでもそれまでに両堂再建する気運で、わずか1年6か月の工期で今と同じ規模の両堂を再建しました。信心ひとつで驚異の再建がなされました。（安政度再建）この時、越中門徒は阿弥陀堂門を寄付しています。越中門徒の中心は砺波門徒ですから、長助の働きも大きかったことでしょう。

しかし完成からわずか4年、蛤御門の変でまたもや両堂は焼失しました。

慶応元年、失意の達如上人が亡くなりました。長助はどんな気持ちだったでしょうか。あとを追うように慶応2年58歳で亡くなってしまいました。

東本願寺の『御作事日記　第十二冊　慶応二年三月六日の条』（資料1）には長助が亡くなったことが忠兵衛（砺波庄太郎））から届けられています。長助は世話人の役職であり、最後まで砺波詰所の主人であったと思われます。

また、本山から釈満意の法名を受けました。この法名は一般にはつけ難く、長助の働きの大きさが窺えるとされています。



『御作事日記　第十二冊』
（写）・慶応二年三月六日条
一、書付を以御届奉申上候
越中砺波郡館村
（敬）妙教寺門徒
小坂村
世話方
長助
年五十八才
右之者去ル天保十二丑年ゟ上京致し御取持
申上候処病気差発二付医師相頼口薬
仕候得共養生不相叶昨五日死去仕候段御届
奉申上候以上
慶応二年
寅三月六日
越中砺波詰所
忠兵衛印
詰合総代
幸蔵印
御作事
御役所

資料１―「真宗大谷派(東本願寺)所蔵　御作事日記　第十二冊」慶応二年三月六日条

3．長助の死後、砺波詰所としての供養

長助の死後、砺波詰所として長助の供養を重ねてきました。戦前のことは、詰所の移動や強制疎開で記録があまりありません。戦後の記録では、昭和25年4月24日瑞泉寺で供養しています。また、昭和28年8月31日善徳寺で永代祠堂経をしています。また、昭和40年8月5日砺波詰所において百回忌法要を厳修しました。招待僧侶は5か寺で、本山から2名、本山堂衆、手次寺、伴僧です。北村家や知多詰所・横山和久平を来賓に砺波地方から大勢がお参りしました。北村家にはその時の写真も残されています。

また砺波詰所には、大正15年作成の大法名記があり、長助を筆頭に歴代が書かれています。



砺波詰所先祖長助殿百回忌法要に参詣
40.8.5　當六兵ヱから出た人

このように、長助は砺波詰所の初代主人として安政度再建に活躍しました。長助に支えられ、また長助を支えた砺波門徒として、長助のことを伝えていきたいと思います。



法名記（砺波詰所蔵）

Ⅳ 明治の妙好人 砺波庄太郎と真宗風土

1．砺波庄太郎



東本願寺では西暦2011年（平成23年）には宗祖親鸞聖人750回御遠忌が行われました。それに向けて御影堂をはじめ両堂御修復事業がと進められました。明治の両堂再建にかけられた当時の門信徒をはじめとする多くの人々の篤き熱意と情熱で、門信徒が延べ70万人も馳せ参じたといわれています。念仏道場再建への心情に驚くばかりです。

越中国砺波郡頼成の片田舎、百姓の子庄太郎が京の東本願寺に向けて出かけたのが若輩の21歳でした。両堂再建に50数余あった奉仕人足詰所の内、砺波詰所に居を構え、朝3時半には起きて仏壇に参り、夕には称名を高らかにして眠りについた。庄太郎は小欲知足、勤勉実行、節約倹素の人で生涯妻を娶らず独身で、本山に尽くした人であったのです。

庄太郎は借金の催促はしなかったし、主食である米を粗末にしなかった。悪いことをした時には決まって天を指し「天道さまが許さない」といったという。

庄太郎の言葉には

「我が家の主人は阿弥陀様なり、わが身は番頭と心得よ」

「我が家に仏壇があると思うな、仏様の家に住まわせてもらっていると思え」

「正信偈和讃は、米のご飯のようなものである。その他のご教化は餅や赤飯のようなもので飽きてしまう。ご飯は飽きることがない」

「信心にとって、朝夕の正信偈や和讃はこれほどよい食べ物はない」

その後、砺波詰所の主として、本山のために骨身を惜しまず働き、東本願寺にとって二人といない人物で、「明治の妙好人」と称されるようになった。本山からは給料もいただかず、心から出た勤めであった。全国50数ヶ所の詰所の触頭として、両堂再建には庄太郎の尽力は多大であった。御影堂再建中、暴風雨素屋根を百有余人の人足を集め百姓一揆のごとく「南無阿弥陀仏」の声と共に無事に護った。庄太郎の言われることならと上納金も山と積まれ、まるで大久保彦左衛門のように重きを成して慕われた人物で、このような経緯で両堂再建はなったのです。

西暦1998年（平成10年）4月に本山では蓮如上人500回御遠忌が行われていた最中、偶然にも大須賀秀道著『妙好人　礪波庄太郎』（明治42年刊）が見つかり、平成13年にはこの著書の現代文『明治の妙好人　砺波庄太郎』が真宗大谷派高岡教区第四組（当時組長吉澤邦麿）より発刊された。その後（組長広橋豊）平成15年に再版されたが、門信徒に熱烈に渇望され、瞬く間に底をつき、再三復刊が求められ、平成21年には三版800部の復刊がされました。

2．砺波の真宗風土

① 真宗と石仏

砺波地方は庶民信仰のあかしである石仏の悉皆調査が昭和55年ごろから行われ、その全容が明らかになってきた。砺波市では1357体、南砺市1440体（一部未調査）、小矢部市1788体の報告がある。これらの多くは道端にある石仏であり、富山県内はもちろん全国的に見てもその造立は多いといえる。その特徴は、地蔵の造立が多い。幕末・明治期にかけて爆発的に造立され、石材は主に庄川町金屋から採掘される青色凝灰岩いわゆる金屋石を使用している。石仏の管理者が周知され、地蔵祭が継続され、収穫祭のような雰囲気がある。路傍の石仏でありながら、ほとんどが御堂に入っている。井波町瑞泉寺太子堂に安置される聖徳太子二歳像の模刻石仏が展開している。弥陀一仏の真宗王国の地でありながら石仏の種類が多く、石動山定着修験による珍しい不動明王・飯綱権現・恵比寿・水天・青面金剛など石仏の造立。名号搭が多く、大岩日石寺磨崖仏の模刻石仏も多い。

真宗では「おおよそ造像･起塔は、弥陀の本願にあらざる所行なり」（覚如著『改邪鈔』）、また「他流には『名号より絵像、えぞうより木造』というなり、当流には『木造より絵像、えぞうより名号』というなり」(「蓮如上人御一代記聞書」）との教えがある。真宗地帯の民俗は民族固有の習俗や信仰を破壊する反民俗性が強いとされ、また弥陀一仏の教えは、民間信仰や庶民信仰を否定し拒んできた。だが真宗王国のこの砺波の地に、多くの石仏の造像は不自然で稀なことなのであろうか。



砺波平野は、江戸時代には百万石の加賀藩に属していた。庄川扇状地の散居村が展開し、幕末期には25万石を産する藩の重要な穀倉地であった。幕末期に石仏が多く建てられた背景には、庶民の経済的な豊かさも重要な要素であるが、真宗に根差した信仰心の篤さも排除できない。教団の教えと、庶民の心情が交差するところに、石仏が存在している。

② 聖徳太子南無仏

真宗が最も輝いて見えるのは、一向一揆の時代の中世である。事実文明13年（1481）の田屋河原の合戦には瑞泉寺を中心とした一向一揆と、福光の石黒氏などの戦いであるが、「闘争記」（『井波誌』）によると「当寺に馳集まる者には、五ケ山勢三百余人、近在百姓二千余人、山田谷又はハンヤ野郷之百姓千五百」がクマデ、棒、鎌を持って参戦したとある。

その後江戸時代の真宗門徒の動きは顕著にうかがい知れないが、明治12年に瑞泉寺の本堂・太子堂の焼失から、その再建に向けた動きは際立っている。明治18年には本堂の再建を成し遂げるが、瑞泉寺のシンボルである太子堂の再建は本堂建設の負債等々でままならなかった。農閑期での太子像や絵伝の巡回が行われるのが、明治20年代からであり、各地で熱狂的に向かいいれられた。巡回を受け入れた家々は、誇りでありステータスであり、砺波の民家が大きくなったのもこれが一因していると思われる。砺波市に「南無阿弥陀佛」と彫られた力士の石碑が63基もあり、草相撲が盛んであったことを物語っている。瑞泉寺太子堂再建を目的にした興行も行われ、若い青年層への深く浸透していた。巡回と期を同じくして、道端には太子堂が建造され、太子南無仏が安置されるようになるが、それは若衆報恩講やお講で学んだ青年層によるものであり、現在砺波地方とその周辺に245体を確認している。

③ 両堂再建

東本願寺は、天明8年（1788）、文政6年（1823）、安政5年（1858）、それに元治元年（1864）蛤御門の変による大火で両堂が焼失し、百年未満に四度も両堂を失っているのである。明治12年に再建の発示が出され、全国に御消息が発せられ、いち早く毛綱が納められた。女性の黒髪で編んだ毛綱は、全国から53筋寄付され、富山県内からは最も多い16筋も寄進されている。(「再建の軌跡」『同朋新聞』2002年1月号)また明治15年には上刀利白山社から、欅の巨木が再建のため献木されている。再建工事の人足小屋として詰所が整えられ、明治22年（1889）の詰所一覧（河村能夫著『京都の門前町と地域自立』）によると、46軒ありその内富山県内の門徒による詰所は五ヶ所が見え、精力的に参加したことがわかる。砺波詰所の明治の妙好人砺波庄太郎は諸国詰所のリーダーである触頭となっている。

ところで私は、県内の石仏研究を主にして庶民信仰に関心を持っているが、石仏は主に幕末から明治期に造立されることが多い。また造像したのが村の若連中つまり青年達のものが多く、石仏の銘文に「村若連中建之」とあることでわかる。地蔵祭りも昔は子供たちが中心であったが、最近は少子化などで細々と行なわれているが、明治期は違っていたのである。地域の若者によって建てられた石仏は、地域で長く大事に維持管理され、若者や子供たちによって祭りもされてきた。若衆報恩講などもこの時期に盛り上がったものである。まさに明治時代は若い庶民がいきいきとしていたのである。獅子舞や草相撲、ばんもち、盆踊りなどの活力となっていて、そのエネルギーが砺波の真宗風土を支えている。

